

Title	死生学教育に対する教育現場からの発言（共同研究報告：臨床死生学研究）
Author(s)	越智, 裕子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-4 : 18-19
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=2339
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

【臨床死生学研究】
死生学教育に対する教育現場からの発言

2009年10月24日、新都心ビジネス交流プラザ4階聖学院教室にて第4回臨床死生学研究会が開催された。参加者25名、東京大学大学院 人文社会系研究科 特任講師 山崎浩司氏から発表があった。本講師は大学教育の講師として、学生や社会人などへの死生学の教育を通しながら、死生学教育の定義、歴史、他国の現状、事例など挙げて紹介している。

用語の定義：本講師は、「教育現場」を、大学および大学院レベル（主に人文社会系）の教育、「教育対象者」を、企業や公的機関に所属する学部生、院生 研究職、社会人、臨床家に限定している。その上で「死生学」とは、「死にまつわる事柄に注目し、そこから生をとらえなおすことで、死生にまつわる現実的な問題に対応しようとする学問であり、学際的、実学・臨床的要素を多分にもち、実存的要素を持つ」と定義づけている。また、死生学がカバーする領域は、医療者生命倫理、教育、喪失や死別、自殺、宗教、葬送、暴力、マスメディアにまつわる事柄であるとしている。

米英の死生学教育の歴史：米国の死生学教育

は、1930年代から葬儀業界が死別悲嘆に関心が持たれたことに始まる。その後、60年代～70年代にかけ、大量消費社会、経済市場主義、医療の向上、病院死の増加、延命治療、軍事へのアンチテーゼなどがあり、80年代には、約1000の大学が社会学、心理学、哲学、倫理学、宗教学、人類学、教育学領域における死生学教育を展開している。しかし、死生学で学士号・修士号を取得できる大学は現在でも多くない。教材としては、『ラストダンス』『死と死別を理解する』が多く使用され、ここでは、死や、葬送儀礼、死後の世界、植物状態と脳死、臓器移植、生命保険、事前指示書、リビングウィル、遺言と相続、自殺や事故死などの問題が扱われている。また、通常の学生のみならず、臨床現場の専門職やリカレント教育などで提供されている。英国の死生学教育は、米国より早く19世紀の末から20世紀初頭で、社会学・人類学、精神医学、さらに行政体系の構築により普及され、本格的な研究は、その後のWW I の大量虐殺の反省、インフルエンザの蔓延、霊性運動、葬送形式変化などで普及された。大学教育は、米国と異なり、独立カリキュラムとして実施されておらず、学位取得は困難であるが、英国政府がリカレント教育体制を推進しているため、実践的なスキルの確保や就職などに役立っている。

日本の死生学教育は、①20世紀初頭の西洋文明との接触や出版物など、②WW IIにおける若者の死、③1970年代以降に大別される。③の背景には、医療技術や病院死の拡大、延命治療などによる生死の選択、高齢化による老いや死の関心、コミュニティーの解体、個別化、大規模災害・事故やテロ活動などがある。そのため70年代の緩和ケア関連の活動、臨床研究会の発足、80年代の上智大学でのセミナー、「生と死を考える会」の発足、90年代には、大学院レベルでは、東洋英和大学大学院にて死生学コースが設立され、90年代には同大学にて、死生学研究所の発足、死生学関連の入門書が増加など、日本の死生学はこの30年ぐらいで発展をみせた。

具体的な事例：東京大学にての死生学教育を取り上げている。実存的な側面を活かすため、講義による知識、知見の提示、命題形式でのグループ

ディスカッションを行っている。また、死生学に関心のなさそうな学生に対しては、大衆メディアの活用、漫画、映画、ビデオなど用いている。

死生学教育の展望：大学間・発達に合わせた学校間の連携、リカレント教育、臨床と学問の連携などがある。

(文責：越智裕子 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程)

(2009年11月2日、聖学院大学1号館1階コモン・ルーム)